

## 2. 1 教育（地方創生を担う人材育成）について

### 総論

奈良女子大学における地域志向科目は、平成28年度は29科目を開講し925名が履修、平成29年度は29科目を開講し961名が履修、平成30年度は32科目を開講し1,810名が履修した（重複履修者を含む）。

平成30年度から開講した教養教育科目「『奈良』女子大学入門」は、奈良県から産業・雇用振興部及び、まちづくり推進局地域デザイン推進課の職員による県の産業政策・雇用強化に関する講義や、(一財)南都経済研究所の研究者による「奈良県の経済動向」に関する講義、奈良経済同友会会員企業経営者による「奈良を知る・奈良で就職」をテーマとした講義を展開し、地元定着を志向した教育内容で、1回生を中心に662名が履修した。

さらに、平成29年度から開講している教養教育科目「なら学+（プラス）」は、事業協働機関（COC+参加校、県・市町村ならびに県内民間企業）から、実務に携わる専門家、実務家を迎え、多彩なゲスト講師によるリレー講義で構成した。奈良の伝統産業、奈良の基幹産業（林業・農業・観光・繊維・製菓）などの魅力や課題に身近に触れながら、課題発見、問題解決、提案力を養い、「生きた知」を身に付けた未来の地域リーダーを育成する科目として展開してきたが、平成30年度は1コマの授業の中で行政、民間双方からゲスト講師を招き、地域への理解を深め、地域の課題等について多面的・多角面でのモノの見方をできるように授業内容を見直した。

全学部生に対する地域志向科目の履修者（入学後に1科目でも履修したことのある実人数）は、平成28年度2,069名に対して614名（履修率29.6%）、平成29年度2,063名に対して994名（履修率48.2%）、平成30年度2,085名に対して1,541名（履修率73.9%）と順調に増加している。

教養教育科目「『奈良』女子大学入門」、「なら学+（プラス）」などの地域創生理解科目を下支えとして、その上にPBL型教育科目による実践を通じて専門性を身に付ける教育プログラムを構築し、平成31年度入学者より地域志向科目の全学必修化の学内手続きを完了した。

起業マインド醸成のため、平成28年度に「女性の起業（働き方）を考える」セミナーを実施した他、平成29年度、30年度においては、「なら学+（プラス）」授業の中で奈良県出身の女性起業家をゲスト講師として招き、当該講師が起業に至った過程や起業の魅力、課題解決などについて紹介した。また、奈良県主催の「キャリア形成講座」（ライフデザインやファイナンスプランニングを学ぶ講座）に共催し、同セミナーを学内にて開催、本学学生が参加した。現在、起業マインド教育を深化させるため、平成31年度から全学共通キャリア教育科目において、アントレプレナー講座を開講するための準備を進めている。

## (1) 地域志向科目の履修状況

### 1) 地域志向科目の開講科目数ならびに履修者数の推移

		平成28年度	平成29年度	平成30年度
開講科目数		29科目	29科目	32科目
内訳	地域創生科目	15科目	13科目	11科目
	PBL科目	14科目	16科目	21科目
履修者数		925名	961名	1,810名
新規開講科目例		キャリアデザイン・ゼミナール (日本一の奈良を知る)	「なら学+(プラス)」	「奈良」女子大学入門 サイエンス・オープンラボ 地域連携運動演習

地域志向科目の開講科目数と履修者の推移

平成30年度の地域志向科目数は前年度より3科目増加の32科目となった。地域志向科目について全学教育ガイド(学部学生全員配布)に独立した項目を設け、履修指導を行った他、同科目の必修化を踏まえた『奈良』女子大学入門などを新たに開講したことから履修者数は前年度より大きく増え、延べ1,810名が履修した。

### 2) 地域志向科目の履修者数ならびに履修率の推移

履修者数と履修率 (重複履修者を除く)		平成28年度	平成29年度	平成30年度
H28年生	入学者数 506名	236人(47%)	297人(59%)	391名(77%)
H29年生	入学者数 515名		277人(54%)	445名(86%)
H30年生	入学者数 520名			435名(84%)

地域志向科目の履修者数と履修率の推移

地域志向科目の履修者数ならびに履修率は平成28年度生(現3回生)391名(77%)、平成29年度生(現2回生)445名(86%)、平成30年度生(現1回生)435名(84%)と増加した。

特に、『奈良』女子大学入門の新規開講ならびに、昨年度から開講している「なら学+(プラス)」の履修者数の増加が要因として挙げられる。

## (2) 平成 30 年度の地域志向科目ならびに履修者数

平成 30 年度の地域志向科目は以下の 32 科目を開講し、1,810 名が履修した。

区分	通番	センター区分		コード	授業科目名	担当教員	履修者数
教養教育科目	1	地創	前	0102300	奈良女子大学入門	小川・成瀬	662
	2	PBL他	前	0136111	パサージュ20A	高田・吉田	11
	3	PBL他	前	0136115	パサージュ32A	宮路	16
	4	PBL他	前	0136116	パサージュ32B	宮路	15
	5	地創	前	0139500	なら学	寺岡 他	201
	6	地創	後	0139550	なら学+(プラス)	成瀬・前川	208
	7	地創	後	0139930	環太平洋くろしお文化論	小路田・西谷内 他	84
キャリア教育科目	8	PBL協	後	0152511	キャリア・デザイン・セミナーB(11)	高村	41
	9	PBL協	前	0152517	キャリア・デザイン・セミナーB(17)	高村	33
	10	PBL他	前	0152541	キャリア・デザイン・セミナーB(41)	三木	5
	11	PBL他	前	0152546	キャリア・デザイン・セミナーB(46)	横山 他	8
	12	PBLサ	前	0152552	キャリア・デザイン・セミナーB(52)	室崎 他	12
	13	PBLサ	後	0152553	キャリア・デザイン・セミナーB(53)	中山・室崎 他	12
文・専門教育科目	14	地創	後	2001070	なら学概論B	寺岡	55
	15	地創	後	2010180	歴史地理学概論	出田・山近	32
	16	地創	前	2010760	地誌A	浅田	15
	17	地創	後	2032120	文化人類学特殊研究	武藤	100
	18	PBL協	前	2033320	なら学フィールドワーク実習	寺岡	8
	19	PBLサ	後	2033570	歴史学実習	西谷地 他	7
	20	PBLサ	前	2033780	コミュニティ・リサーチ	水垣・寺岡・佐藤	34
	21	PBLサ	後	2033790	コミュニティ・アクション	水垣・寺岡・佐藤	8
	22	PBL協	前	2033900	文化メディア学実習B	内田	13
	23	地創	後	2034020	なら学演習	武藤・寺岡	26
	24	地創	後	2034780	地域社会の課題演習	高田・浅田・西村	14
	25	地創	前	2034990	現代民族論演習	内田	13
理・専門教育科目	26	PBL協	前	3003810	サイエンス・オープンラボ I (A~E)	小林 他	39
	27	PBL協	前	3003910	サイエンス・オープンラボ II (A~E)	小林 他	16
	28	PBL他	前	4504200	森林生物学野外実習	酒井・井田 他	16
	29	PBL他	前	4504300	河川生物学野外実習	片野 他	18
生環・専門教育科目	30	PBLサ	後	5522000	地域居住学	中山	36
	31	PBLサ	前	5525000	福祉住環境学	室崎	39
	32	PBL他	後	5768000	地域連携運動演習	成瀬	13
合計						1,810	

平成 30 年度の地域志向科目ならびに履修者数

(3) 『奈良』女子大学入門』の開講 履修者 662名

教養教育科目『奈良』女子大学入門』は、奈良女子大学で学び、安全で充実したキャンパスライフを送るために必要不可欠な内容をオムニバス形式で講義する授業で、Ⅰ.キャンパスライフの充実、Ⅱ.奈良で暮らす、Ⅲ.奈良女子大学で学ぶ、Ⅳ.奈良を知る・奈良で就職の4つテーマで構成されている。

学長、学部長からのメッセージのほか、本学の歴史や男女共同参画社会推進のための取組、奈良県の経済や県内企業との共同研究を紹介し、キャリアデザインを奈良からスタートする授業となっている。

教育テーマⅣ	COC+事業について	やまと共創郷育センター
	奈良県の経済	(一財)南都経済研究所
「奈良を知る・奈良で就職」	奈良県の動向	奈良県雇用政策課・県土マネジメント部
	奈良県企業との共同研究	理事(研究・情報担当)
	奈良で就職①	学生生活課就職係
	奈良で就職②	奈良経済同友会会員企業2社

p



教室の様子



授業の様子

#### (4)「なら学+ (プラス)」の開講～奈良を通じて地方創生の知見を深めよう！～

履修者 208名

教養教育科目「なら学+ (プラス)」は、事業協働機関 (COC+参加校・協力校、県・市町村ならびに県内民間企業) からの専門家、実務家を迎えるなど多彩なゲスト講師によるリレー講義で構成されている。奈良の伝統産業、奈良の基幹産業 (林業・農業・観光・繊維・製薬) などの魅力や課題に身近に触れながら、課題発見、問題解決、提案力を養い、「生きた知」を身に付けた未来の地域リーダーを育成する科目として昨年度より展開しているが、1コマの授業の中で行政、民間双方からゲスト講師を招き、地域への理解を深め、地域の課題等について多面的・多角面でのモノの見方をできるように授業内容を見直した。

毎回小問を課したほか、最終レポート「奈良への提案」に具体的な内容や、提案に至った理由・背景や将来展望など課題解決策を提出させ、PBL授業の要素を盛り込んだ。

平成30年度の授業内容は以下のとおり。

	授業内容	担当教員 (ゲスト講師)
1回	ガイダンス	やまと共創郷育センター (成瀬・前川)
2回	奈良でのコンテンツツーリズムを考える	奈良県立大学【COC+参加校】
3回	観光産業への理解を深め、課題を探る	奈良市観光協会&飛鳥観光協会
4回	女性の起業やワーク&ライフプランを考える	奈良県女性活躍推進課&(株)T Able a Cloth
5回	生活福祉 (地域で暮らす) を考える	奈良佐保短期大学【COC+協力校】
6回	地域福祉 (地域で暮らす) を考える	奈良県社会福祉協議会&(社福) 功有会
7回	モノづくりを通じての地方創生	奈良工業高等専門学校【COC+参加校】
8回	伝統産業 (林業) の理解と課題を探る	奈良県森林技術センター&(株)イムラ
9回	産学連携と地場産業 (靴下) の理解と課題を探る	奈良女子大学&(株)キタイ
10回	伝統産業 (製薬) の理解と課題を探る	奈良県薬事研究センター&田村薬品工業(株)
11回	地域社会における技術者の役割	奈良工業高等専門学校【COC+参加校】
12回	奈良の現代産業に聞く	(株)ATO UN&DMG森精機(株)
13回	柿 (奈良特産) を通じたマーケティングを考える	奈良県農林部&(株)マックス
14回	地方自治体の役割・課題を探る	奈良県地域振興部&下市町
15回	学生による地域活動発表と地方創生にかかる講演	本学学生2グループ&南都経済研究所



授業の様子

## (5) PBL型授業（課題解決型授業の一部紹介）

### 1) なら学フィールドワーク実習（担当：寺岡 伸悟）

「なら学フィールドワーク実習」は、文学部専門教育科目に位置付けられる科目である。今年度は、人文社会学科の2・3回生が履修している。今年度の特徴は、履修学生自らが学生記者となって、希望する県内企業を複数回訪問、経営者、従業員の方へのインタビューや営業、生産などの現場を取材し、学生目線で県内企業の魅力を発見・発信する実践的な授業となっている。取材に基づく記事・誌面づくりを通じて企業研究、社会人（企業人）との応対練習の他、学生自身の就業力・社会人基礎力の向上も期待できる授業である。

今回、ご協力いただいた県内企業訪問先は、（社福）ぷろぼの、ディライト㈱、スクーター㈱、奈良テレビ放送㈱の4社である。

授業はやまと共創郷育センターの前川特任教授と共同で行った。まずガイダンス時に奈良県内企業のパンフレットを多数用意し、学生に閲覧してもらったところから授業は始まった。学生たちはすでにこの段階で、企業によってPR力に差があることや、全般的にそれぞれの企業の活動内容のわかりにくさを感じたようである。こうしたことが履修への動機を形成したと思われる。訪問先の企業選定にはやまと共創郷育センターが作成した県内企業一覧が大変役立った。そのなかから社会福祉法人、サービス業、製造業、そしてメディアと、多彩な対象が選ばれたと思われる。

こうした授業では通常、一度きりの訪問で報告書を作成する事例が多いことを教員は知っていたので、少なくとも3度は訪問することで、これまでとは違う深い理解を、その企業に対して行ない、そこから、奈良女子大生が奈良の企業に就職を考えるための参考となるような魅力・情報を「掘り出してくる」という本格的な狙いがあった。

1度目はやまと共創郷育センターの前川特任教授に同伴していただいたの訪問だったが、それ以降は、企業の担当者の方とのやりとりも学習のうちであり、それが対象への理解を深めることにもなると考え、履修生にがんばってもらった。授業中盤からは、そうして集まってきた情報を、学生向けのリーフレットにするとすれば…という想定でまとめていこう、という方向性に決まった。これも履修生たちの議論の中から出てきた方向性である。そこで、リーフレットの編集やそれを意識した取材の専門家をゲスト講師として授業に招聘し、学生たちに懇切丁寧に取材と編集の基本を教えていただいた。一月に一度のペースで取材に赴き、その結果を全員で共有しお互いにその企業をわかりやすく紹介するために必要な観点を話し合うという方法を3回繰り返したことになる。企業の仕組みや企業人というものについて、どんどん理解が深まっていく様子が感じられた。また、奈良で働く良さ、奈良にもこんなに頑張っている企業や人がいるのだ、ということを理解してくれているようで、手応えの感じられる授業だった。授業は前期では到底終了することができず、リーフレットの編集が今も続けられている。

履修生の中から、またこの話を聞いた学生の中から、奈良への就職を考える学生が出てくれることを期待している。



スケーター(株)を訪問



奈良テレビ放送(株)を訪問



(社福) ぷろぼのを訪問



ディライト(株)を訪問

## 2) 「パサージュ20A」 (担当: 高田 将志・吉田 容子)

### ①授業実施日

2018年度「パサージュ20A」授業(全学1回生対象)

第1回: 合同オリエンテーション

第2回(4月17日): ガイダンスおよび現地訪問のための資料収集、事前学習の方法の説明

第3回(4月24日): 下市町・吉野町現地訪問のための作業実習(1)

第4回(5月8日): 下市町・吉野町現地訪問のための作業実習(2)

第5回～第7回(5月12日～13日、1泊2日): 下市町・吉野町での野外実習(1)～(3)

第8回(5月22日): 下市町・吉野町での野外調査結果の報告会

### ②授業の概要

本授業における学びの特徴は、「実際に、地域に足を運んで、自分の目で確かめて実感する」ことである。今回の野外実習地として、昨年度本授業で訪れた奈良県吉野郡下市町に、同町に隣接する吉野町を加え、1泊2日で行った(1回生11名(文学部10名、理学部1名)、教員2名、TA学生1名)。

下市町や吉野町の地場産業である木材加工業の現状を見学し、奈良県南部の中山間地域が直面している過疎化や高齢化、林業が抱える諸問題について、参加学生が主体的に考えることをねらいとしたものである。野外実習前の授業では、下市町や吉野町について関心を持ったテーマを選び、各自下調べを行って発表した。野外実習後の授業では、参加学生による報告会を行った。

野外実習1日目: 10時半に近鉄「下市口」駅(大淀町)に集合し、徒歩で大淀町～下市町の商店街を見学しながら、昼頃に下市町役場敷地内のアクティビティセンターに到着。昼食後、下市町の地場産業である三宝・神具の生産を長年手がける木工所を見学(別添写真)。

野外実習2日目: おもに吉野町内の見学で、午前中は、吉野ブランド木材を扱う製材所を見学し(別添写真)、昼食後は、吉野貯木場とその周辺を散策した後、吉野杉で建てられたゲストハウス「吉野杉の家」を見学した。

### ③学生の感想(学生レポートより抜粋)

パサージュを通じて、普段なかなか訪れる機会のない場所を訪れることができ、貴重な体験となった。実際に現地を訪れることでしか体験できないことがあるということ、あらためて実感することができただけでなく、仲間との楽しい思い出も作ることもできたので、パサージュを履修して本当に良かった。

この授業を選択した動機は、大学での野外実習がどのようなものか気になったからです。最初は、下市町や三宝、吉野林業についての知識はほとんどない状態でした。ですが、下調べ学習や、先生の説明、TAの大学院生の発表によって、ある程度の予備知識を得てから、課外学習に臨めたので、現地でのお話の理解も深まったように思います。

最初の事前学習の段階では、三宝などの歴史的・文化的なことに興味があったのですが、実際に下市町や吉野町に行って木材を身近に見学して、自然を感じる樹木そのものに惹か



れ、レポートのテーマにしました。自分の新たな興味を発見することができたのは、とても有意義なことだったと思います。

林業についてくわしく学ぶことができました。山林から伐採した木材がどのように河川によって運ばれ、売買されたり加工されるのかを知りました。林業の発展や衰退が社会の変化に大きく影響されてきたことがわかり、産業と歴史の関わりについてもっと深く知りたいと思いました。

#### ④授業成果

担当者の専門分野（「地理学・地域研究」）では、とにかく現場に出て現場を見る、ということが大事である。文献講読や統計分析などのいわゆるインドア・ワークとともに、フィールド・ワークの重要性についても、1回生の段階から理解してもらえるよう、本授業の内容を設定した。過疎地域に足を運んだことのない学生が大半であったので、過疎の現状を当該地域の地場産業を通じて具体的に知り、地域が抱える問題を考えてもらいたかった。野外実習時の学生の様子や最終レポートを見る限り、現場に出る楽しさや、そこで何を見て、何を感じ、何に興味を持つのかということに各自積極的に関わってくれたと思う。



三宝・神具の製造について伺う



原木から木材加工までの工程を見学



吉野杉の原木を観察

### 3) 「コミュニティ・リサーチ」：地域コミュニティの課題把握法

(担当：水垣源太郎・佐藤克成・寺岡伸悟)

#### ①授業実施日

第1回 4月28日 講義とアイスブレイキング、調査方法論、学外実習準備

第2回 5月19日～20日 学外実習Ⅰ（奈良県吉野郡下市町）

第一日：農山村生活体験（摘蕾体験）、朴の葉寿司体験、写真撮影実習、農山村生活体験（家庭料理調理体験）

第二日：農山村生活体験（家庭料理調理体験・生活実習）、下市町巡検

第3回 グループ別活動（日程はグループごとに調整）

第4回 7月7日～8日 学外実習Ⅱ（奈良県吉野郡下市町）

第一日：グループ別現地調査、農山村生活体験（家庭料理調理体験）

第二日：農山村生活体験（家庭料理調理体験・生活実習）、グループ別現地調査  
フォトブック制作

#### ②授業の概要

本授業（コミュニティ・リサーチ）は、後期授業（コミュニティ・アクション）とともに、地域コミュニティの現状を理解するためのコミュニティ社会学の理論と方法を実践的に学び、それを通して、課題の解決の糸口となるアクション（PRコンテンツ制作や特産品開発、成果イベントなど）の企画・実践の過程を体験的に学ぶことを目的としている。

本授業ではまず、コミュニティ社会調査の方法論とその実践例（らくらく農法）を概説した後、下市町内各地の地域住民の方々の協力を得て、2回の現地調査実習と巡検、農山村生活体験（柿の摘蕾体験、伝統料理の調理体験、生活実習）を行った。その成果はフォトブックにまとめて、後期授業後にご協力いただいた地域住民の方々に還元する予定である。

担当教員は水垣源太郎（文学部）、佐藤克成（生活環境学部）、寺岡伸悟（文学部）の3名であり、履修生は34名（文学部29名、生活環境学部4名、留学生1名）であった。

#### ③学生の感想

学生からのレポートによれば、そのほとんどが本授業が「おもしろかった」、本授業を通して「新しい知識やものの見方がとても得られた」と回答し、後期授業の履修へとつながった。とくに今年度前期はグループ別に活動計画を立てて自主的な活動を行ったばかりでなく、地域住民の方々から伝統料理の調理を体験させていただいたり、地域生活に関するお話を直接伺ったりしたことが貴重な体験となり、楽しく地域を学ぶことにつながっている。

#### ④授業成果（担当教員からのコメント）

履修生は、大都市圏出身の学生とそれ以外の地方の学生であり、もともと地域コミュニティの問題への関心が高かった。奈良県南部中山間地域の課題を現地住民の方々から直接うかがうという経験、地域の持つ文化資源を体験的に見直すという経験によって、学生は奈良を理解するのみならず、地域コミュニティの課題解決のための実践的方法論を習得することができた。とくに、その調査（集落点検）の成果がフォトブックという形に残る成果

となり、ご協力いただいた地域に還元することができたことも学生と地域の両方に役立つ授業となったと考えられる。



グループ別現地調査（農産物加工）



グループ別現地調査（地場産業）



グループ別現地調査（伝統産業）



グループ別現地調査（伝統産業）



農山村生活体験（家庭料理）



農山村生活体験（伝統料理調理体験）



データ整理



参加者集合写真

#### 4) 「コミュニティ・アクション」：地域コミュニティの課題解決に向けた活動実践

(担当：水垣源太郎・佐藤克成・寺岡伸悟)

##### ①授業実施日

第1回 10月20日 講義、グループ分け、アイスブレイキング・担当・佐藤ドローン、  
全方位カメラ、タッチパネルを午前中1か所、午後1か所で試す。

第2回 11月10日～11日 学外実習Ⅰ（奈良県下市町）

第一日：農山村生活体験（柿収穫体験）、記録ツール実習、グループ別現地調査

第二日：グループ別現地調査

第3回 グループ別活動（日程はグループごとに調整）

第4回 12月1日～2日 学外実習Ⅱ（奈良県下市町）

第一日：グループ別活動

第二日：下市町・奈良女子大学連携公開講座

「最新の動画ツールを活かすドローン、VR、Youtube：学生からの提案」

（於：広橋会館）での成果報告

##### ②授業の概要

本授業（コミュニティ・アクション）は、前期授業（コミュニティ・リサーチ）に引き続き、地域コミュニティの現状を理解するためのコミュニティ社会学の理論と方法を実践的に学び、それを通して、課題の解決の糸口となるアクション（PRコンテンツ制作や特産品開発、成果イベントなど）の企画・実践の過程を体験的に学ぶことを目的としている。

本授業では、佐藤講師の主指導の下に、ドローン、全方位カメラ、VRなどのツールを社会的に役立てる方法を考えた。履修生は、まず事前課題として、前期コミュニティ・リサーチの経験を踏まえ、下市町の魅力を生かし、あるいは抱える課題を解決するためのツール活用法について事前レポートを作成した。その内容に基づいて3つのチームに分かれ、各課題に応じた現地調査計画を立案し、学外実習Ⅰにおいて実査を行った。その結果を踏まえて、動画やプレゼン資料を制作し、第4回学外実習Ⅱの第二日に開催した公開講座において発表した。公開講座では学生報告の後にディスカッションの時間を設け、聞きに来ていただいた地域住民の方々にフィードバックをいただいた。その結果を踏まえ、最終成果物としてプレゼンファイルと動画を提出させた。

担当教員は水垣源太郎（文学部）、佐藤克成（生活環境学部）、寺岡伸悟（文学部）の3名であり、履修生は10名（文学部8名、生活環境学部1名、大学院生1名）であった。

##### ③学生の感想

学生のほとんどが本授業を通して「新しい知識やものの見方がとても得られた」と回答している。とくに後期は公開講座での発表を目標として、前期で学んだ地域の問題をふまえて、地域に役立つアクションを自主的にデザインし、住民の方々からフィードバックをいただいたことが貴重な体験となった。

#### ④授業成果（担当教員からのコメント）

本授業では、前期授業において地域の特性を学んだ履修生が最新動画ツールに関する知識と感性を活かしたビデオや地域特産品の制作・開発に取り組んだ。昨年度に比べ、前期後期のつながりを意識した授業内容としたため、学生一人一人が地域の課題についてリサーチを行ったうえでアクションを考えるという地域連携教育の形が定まったといえる。公開講座の際には地域住民の方々から学生からの提案に対して、地域住民の方々から提案に関する問題点や課題、要望や期待などとても真摯なご意見をいただいた。ここに記して感謝を申し上げる。

次年度は最終年度として、この授業形態を継続的に実施するための更なる工夫を行いたい。



講義



現地実習（柿の収穫体験）



ドローン撮影実習



食事風景



公開講座①



公開講座②



公開講座③



公開講座



公開講座集合写真



履修生集合写真

## 5) 地域社会の課題演習 2018 (担当: 西村雄一郎・浅田晴久・高田将志)

### ①授業実施日

- 第1回 10月4日 初回ガイダンス
- 第2回 10月24日 事前学習
- 第3回 11月10日～11日 1泊2日で十津川村を訪問
- 第4回 12月12日 事後学習

### ②授業概要:

本授業では、農山村を中心とした「地域社会」が現在いかなる問題を抱えているのかを実体験を通して知ることを第一の目的とした。そして、それらの問題がどのような背景から生み出されたものか多面的に検討し、地域社会についての理解を深めるとともに、課題解決への道を探ることをめざした。

10月4日に初回ガイダンスを実施して、対象地域である奈良県吉野郡十津川村の概要を説明した後、住民への調査事項を検討するように履修生に指示した。10月24日の第2回目の事前学習日には、履修生から具体的な調査項目を募り、日常生活の便、災害対策、子供や親戚との関係、祭りや伝統行事、食生活、方言、などさまざまな角度から十津川の社会の現状を探る計画が立てられた。

11月10-11日に1泊2日で十津川村を訪問した。公用車2台とレンタカー1台の計3台に、教員3名と学生13名が分乗して出かけた。1日目は道の駅十津川郷の地下にある「むかし館」と十津川村歴史民俗資料館で十津川村の地理や歴史・民俗を学習した後に、武蔵集落の教育資料館を見学した。教育資料館は昭和中期に利用されていた旧小学校を改築したものであり、村内住民から当時の学校や地域の話をつかぎうことができた。また地図を見ながら集落内を歩き、空き家や耕作放棄地の場所を確認した。

2日目は武蔵集落の住民の方と、旧小学校の周辺を清掃しながら、同時に住民への質問も行った。集落で地域活性化協議会が活動していること、バスの本数が少ないが不便さを感じないこと、共有林を今でも維持していること、農作物への獣害が多く困っていること、など住民の生の声を聞くことができた。その後は、玉置神社、谷瀬の吊り橋を見学し、十津川村の観光地としての側面も確認することができた。

12月12日に事後学習を行い、各自が十津川村で観察した事項、住民から聞き出した話などを履修生の間で共有した。現地調査の結果は、写真とともに各自でレポートにまとめて、最終的に授業の報告書を作成する予定である。

### ③授業成果 (教員のコメント)

授業の目的を達成するためには現地協力者との事前交渉が不可欠であるが、十津川村武蔵集落での調査は本年度が初めての試みであったため、村役場の担当者との連携が上手くいかず、住民の協力が得られるかどうか、現地調査の直前まで不透明な状況であった。結果的に住民の方々の発案により、一緒に清掃活動をしながら話を聞くという、通常の調査ではできない貴重な経験をすることができた。都会育ちが多い学生たちにとっては、十津

川村の環境はまったく経験したことのないものばかりであり、メディアでは報道されないが日本には多様な地域が存在することに気づききっかけになったと、提出レポートからうかがえる。



十津川村教育資料館の見学



十津川村武蔵集落での清掃活動



## 6) 福祉住環境学 (担当: 室崎 千重)

### ■住環境学基礎実習における十津川村での活動報告

#### ①授業実施日

8月13日～14日	谷瀬集落の村づくり活動実践(盆踊り・看板整備等)
10月12日～14日	村の魅力発見調査(高森のいえ・平谷地区・笹の滝等) 十津川村谷瀬集落の村づくり活動の振り返り
11月11日	高森集落の“高森のいえ”センター広場活用の試み
1月17日～18日	谷瀬集落の寄合参加、散歩道の現状調査とスタンプラリー提案
2月17日、18日	美吉野醸造にて 純米酒「谷瀬」の仕込み体験
3月14日～15日	谷瀬集落の寄合参加、散歩道スタンプラリー設置
後期随時	谷瀬集落のスタンプラリー企画の検討、木製スタンプ台・スタンプ用台紙・スタンプのデザインと製作

#### ②授業の概要

住環境学基礎実習では十津川村谷瀬集落に通い、村の方と一緒に今後の移住・定住を見据えた村づくり活動の実践に引き続き取り組んでいる。本授業は地域課題の理解と実践を通して村づくりの方法を学生が主体的に学ぶことを目的としている。初年度からの活動の継続に加えて、毎年履修学生が地域での気づきをもとに新たな提案を考え、実践している。継続的な活動として、谷瀬集落内のゆっくり散歩道の看板整備、古民家の休憩所“こやすば”の活用、純米酒「谷瀬」の米作りからお酒の仕込みまでの参加がある。今年度の新たな活動としては、谷瀬集落内の散歩道をもっと楽しんでもらい、集落の魅力を知らうため、散歩道スタンプラリーの企画・実施と谷瀬集落の年中行事もわかる谷瀬カレンダーの製作、高森集落でのセンター広場の活用実践を行った。現地調査をもとに学生が立案し、地元の寄合での提案を経て、地域内での活動を進めている。

担当教員は室崎千重(生活環境学部)、今期は生活環境学部3回生4名と室崎研究室の学生8名が取り組んだ。

#### ③学生の感想

学生の感想では「看板づくり、十津川木材のアクセサリづくり、谷瀬の昔の暮らし写真展など自分たちが関わったものが地域に残せた。経験のない学生でも、地域に貢献できることに気づいた」「村の人の生活の知恵を、体験を通して学ぶことができた」「若い人の雰囲気や学生のアイデアが村にとって役に立つと言ってもらえて頑張りたいと思ったし、嬉しい」などが挙げられており、地域での実践を通しての学びが得られている。

#### ④授業成果(担当教員からのコメント)

集落の生活体験・集落の方から聞く話を通して、学生が活動・提案を主体的に考え、提案し、実践する貴重な機会である。半年間の活動は小さいものではあるが、集落の方から喜ばれる経験を通して、学生も十分に地域貢献ができるという実感に繋がっている。継続的

な活動により、既存の提案に毎年の学生が新たな提案・見直しを行うことで、環境整備の質も向上しよいものになりつつある。集落と学生が互いに学び合い協働できる関係ができている。



谷瀬集落内のゆっくり散歩道の看板整備



谷瀬集落内の伝統行事への参加



集落内を彩る苔玉づくり



高森集落での広場活用の試み



谷瀬集落での酒米の収穫

## ■福祉住環境学 十津川村の高齢者の暮らしを学ぶ

### ①授業実施日

6月12日	学内にて十津川村概要説明、高齢者への質問項目検討
6月16日～17日 (Aグループ17名)	十津川村神納川集落の地域活動、高齢者3名のお話 高森のいえ、復興公営モデル住宅の見学、レクチャー
6月23日～24日 (Bグループ14名)	十津川村谷瀬集落の散歩道整備、高齢者2名のお話 高森のいえ、復興公営モデル住宅の見学、レクチャー
2018年7月3日	学内にてグループごとに現地での気づき、提案を発表

### ②授業の概要

福祉住環境学（住環境学科専門科目）の5回は、中山間地域の高齢者福祉について十津川村での学習を通して学び、課題を深く理解し解決に向けた提案を考えることを目的としている。十津川村の集落に暮らす高齢者から暮らしの様子、生活課題のお話を通して地域への理解を深め、高齢者も最期まで暮らし続けられる村づくりの実践である「高森のいえ」等の見学を行う。学生はグループごとに、地域での気づき、課題、提案を整理して発表する。担当教員は室崎千重（生活環境学部）、生活環境学部3回生31名が履修した。

### ③学生の感想

学生の感想レポートには、「実際に生活する人の様子から現代の福祉の意義や立ち位置を改めて確認し、今後何が必要なのか考える機会となった。」「高齢化、過疎化が進んでいたが、それ以上に素晴らしい村と感じた。」「村の人々がとても温かく、人と人とのつながりを大切に暮らしている。」「村を良くしたいという住民の強い意志があるからこそ十津川村は人口が減っても魅力は減らないし、今よりさらに魅力的な村になることができると思う。」などが挙げられた。

### ④授業成果（担当教員からのコメント）

中山間地域の高齢者から暮らしの様子・地域への想いを聞き、一部ではあるが集落活動に関わることで、中山間地域の課題と魅力を理解することができた。人口減少高齢化の中で、住民が生き生きと暮らすための環境づくりを考える貴重な学びの機会となっている。



高森のいえ見学



地域の高齢者のお話を聞く

## ■鹿と木 マルシェの開催（キャリアデザイン・ゼミナール：奈良の木 造形演習）

### ①授業実施日

2018年5月12日、6月2日	奈良の木でお箸づくり、スツールづくり
2018年6月30日	木工マルシェの企画案、試作
2018年10月20-21日	十津川村にて林業実習（間伐体験、木工室見学等）
2018年11月10日、17日	木工マルシェに向けた準備（インスタパネル、鍋敷き、カッティングボードの製作）、森を伝えるパンフ製作
2018年12月1日	奈良女子大学の中庭にて鹿と木マルシェの開催
2019年1月26日	鹿と木マルシェの振り返り

### ②イベントの概要

“鹿と木 マルシェ”は、キャリアデザイン・ゼミナール「奈良の木 造形演習」の授業の中で、奈良の木の魅力を地域の人、履修していない学生に伝えることを目的として昨年よりはじめてのイベントである。学生が十津川村の杉と檜で創った木工品の素材を原価で販売し、参加者にヤスリかけ、オイル塗りの仕上げ作業を体験してもらい、作品を持ち帰ってもらう。今年は新たに鍋敷きを新たにデザインして商品として追加し、来場者に楽しんでもらえるように杉材でつくったインスタパネルとこどもが中に入って遊べるテントも学生が考えて製作した。奈良の木、そして森を知ってもらうために、商品につけるリーフレットも学生が準備した。今年も天気に恵まれ、120人を超える人がマルシェに足を運び、木に親しんだ。

### ③学生の感想

学生の感想では、「お客さんが笑顔で嬉しかった、運営もとても楽しかった」「お客さんが来てくれるか不安だったが、地域の幼稚園の子から年配の方まで幅広い年齢層の方に楽しんでもらえてよかった」「イベントの運営をしてみて、楽しさとともに大変さや難しさも学ぶことができ、とてもいい経験になった」「家族や友達と楽しく物作りを体験できる場を提供することはとても大切なことだと思った」「後日、作ったものを気に入って使っているとの声を聞くことができ、参加者の皆さんに楽しんで頂けたことを実感できた」などが挙げられており、学生にとっても貴重な経験となった。

### ④授業成果（担当教員からのコメント）

履修生が感じた木の魅力を一人でも多くの人に学生が伝えることを目標として、昨年度からはじめてのイベントであるが、学生の新たなアイデアを具体化しながら地域のこども・大人が木に親しみを持つ場づくりができた。今年も十津川村での林業実習が実現し、森を守ること、木がどのように育つか、関わる人の存在を知ったうえで提案・実践に繋がられた。



十津川村での林業実習



鹿と木 マルシェの風景



イベント参加者の木工体験の様子



マルシェのためのパーツ準備の様子

## 7) 現代民俗論演習 (担当: 内田 忠賢)

文学部・文化メディア学コースの演習科目のうち、生活文化に関する研究論文などを精読するゼミ。COC+事業に関連させ、県内の1地域を理解することを目的に、先行研究を批判的に読んだ。今年度は、桜井市三輪門前町を理解するため、①宗教都市、②日本の門前町、③三輪門前町の3段階の категорияで先行研究を精査し、精読した。その学習成果を、現地でのフィールドワーク(文化メディア学実習B)に生かし、その成果を調査報告書として刊行した。

## 8) 文化メディア学実習B (担当: 内田 忠賢)

文学部・文化メディア学コースの実習科目のうちBでは毎年、取材実習を行い、報告書を作成する。体験学習だけでなく、コンテンツ制作を行う。マスコミは勿論、文化発信を仕事とする自治体業務などを念頭に置いている実習である。COC+事業に関連させ、県内の1地域をフィールドに取材実習を行う。今年度、フィールドとして桜井市の三輪門前町を設定した。履修生たちは自分たちで設定した取材テーマに沿い、2~3人のグループに分かれ、現地にて積極的に取材を行った。その成果を報告書にまとめ刊行した。なお、専門科目「現代民俗論演習」において先行研究等を批判的に精読し、本演習を実りあるものにした。



まえがき	二
お世話になった方々・編集者	二
大神神社への参拝者	三
六月一日 大神神社に参拝して	三
豊年講のついでに朝市	五
親子三世で行く大神神社参詣	七
パワースポットとして大神神社	七
三輪山の神々と門前町の人々の信仰	九
狭井神社と人々御神水や神体山・三輪の祭り	十一
三輪山でのスピリチュアル体験	十三
三輪の食	十五
食から見る三輪の名産	十五
三輪素麺のおいしさの秘密	十七
三輪素麺の魅せ方を考える	十九
ゲストハウス	十九
町家ゲストハウスみもろの運営	二十一
「町家ゲストハウスみもろ」を利用する外国人宿泊客	二十三
三輪観光の現状と課題	二十五
三輪門前町に住む人々まちを守る意識	二十七
オフショット	二十九
参考文献	三十一
編集後記	三十六

## 9) 歴史学実習 (担当: 西谷地 晴美・田中 希生・西村 さとみ・矢島 洋一)

①履修者: 7名 任意参加院生: 7名 担当教員: 4名

②本年度の歴史学実習(後期)では、履修予定者と任意参加院生による「夏期学生現地調査」と、2泊3日の「歴史学実習」を実施した。

「夏期学生現地調査」の概要は以下のとおりである。

A. 9月9日～11日に、院生2名が、吉野郡十津川村不動滝・大宮神社・歴史民俗資料館・高滝神社・天辻本陣跡等を調査。

B. 9月14日に、院生3名が、丹生川上神社中社・東吉野村民俗資料館・天誅組関連史跡等を調査。

C. 9月29日に、履修予定者4名が、大和丹治城跡・本善寺・十二社神社・宮滝遺跡・吉野歴史資料館等を調査。

D. 9月29日に、履修予定者3名が、吉野神宮、金峯山寺、吉野朝宮跡、吉水神社、如意輪寺等を調査。



この「夏期学生現地調査」は、調査地・調査対象・移動ルート・交通手段など、調査計画のすべてを、履修予定者および任意参加院生が自主的に計画して実施したものであり、参加学生・院生の吉野地域に対する問題関心が明確化し、高い教育効果を生み出した。

11月12日～14日に実施した「歴史学実習」の概要は以下のとおりである。

12日: 奈良市 → 室生寺 → 龍穴神社 → 大野寺 → 旧旅籠あぶらや → 長谷寺 → 森野旧薬園 → 宇太水分神社中社 → 竹林院群芳園

13日: 金峯山寺 → (金峯山寺バス停…路線バスで移動…奥千本口バス停) → 西行庵…金峯神社…吉野水分神社…勝手神社…殿出 → 丹生川上神社下社 → 洞川温泉

14日: 龍泉寺 → 大峯山女人結界門 → 天河大弁財天社 → 賀名生歴史民俗資料館 → 西吉野城戸 → 下市町平原の辻 → 熊野神社 → 願行寺 → 千石橋 → 奈良市

この歴史学実習には、履修生7名が参加し、大学院生7名がCOC+事業-中期計画関連で同行した。授業担当教員4名が引率し、12日のみ他教員1名が参加した。今回の歴史学実習は、吉野の西行庵から下市町の殿出までを、すべて歩いて調査することで、南北朝期の南朝勢力の吉野脱出ルートを考える内容を盛り込んだ。また、大峯山女人結界門を見学することで、女性と宗教との関係を象徴的空間で考えることができるように配慮した。



## 10) 地域居住学 (担当: 中山 徹)

### 【目的】

地域居住学では本学と包括協定を結んでいる野迫川村をフィールドとし、山村での暮らし、仕事を学生が現地に行き、現地の方と交流して実践的に学ぶことを目的としている。

### 【内容】

以下のようなスケジュールで実施した。

#### ①10月23日(火)、講義、場所: 大学

野迫川村の概要、日本の過疎地について、紀伊半島大水害(2011年)の状況及び復興について、フィールドワークの説明

#### ②10月27日(土)~28日(日)、フィールドワーク、場所: 野迫川村

27日: 本学卒業生で野迫川村役場に勤務する方の講義

28日: 4班に分かれ野迫川村でヒアリング。ヒアリング先は、野迫川村漁協、ホテル野迫川、民宿かわらび荘、津田林業、いなか食堂、しいたけ栽培所、野迫川村猟友会等。野迫川村での暮らし、仕事を中心に伺った。

#### ③10月30日(火)、ワークショップ、場所: 大学

フィールドワークの成果をパワーポイントにまとめ発表した。

### 【講評】

毎年、野迫川村を訪問しているがフィールドワークの内容は変えている。今年は野迫川村内の職場を回ったが山村での仕事が理解でき有益であった。野迫川村のような山村を訪問した経験がある学生はごく一部であり、山村の状況についても理解が深まったと思われる。





## (6) 『奈良』女子大学入門』における地域志向に関する学生の意識調査

教養教育科目『奈良』女子大学入門』の履修生を対象に、平成30年7月に「地域（奈良）への関心」に関するアンケート調査を実施した。

『奈良』女子大学入門』は平成30年度から開講した地域志向科目で、奈良女子大学で学び、安全で充実したキャンパスライフを送るために必要不可欠な内容をオムニバス形式で講義するもので、今年度は1・2回生を中心に662名が履修した。

学生の意識調査に際しては、学部、学年、出身地の他、地域への関心、地域への問題意識、地域への居住、地域との交流意思、地域内での産官学の連携といった5つの領域から10件の質問項目を設け、それぞれ6つの回答文言を設け無記名で実施した。

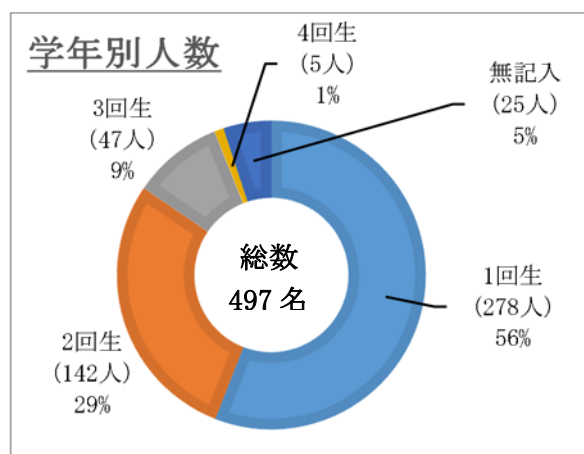
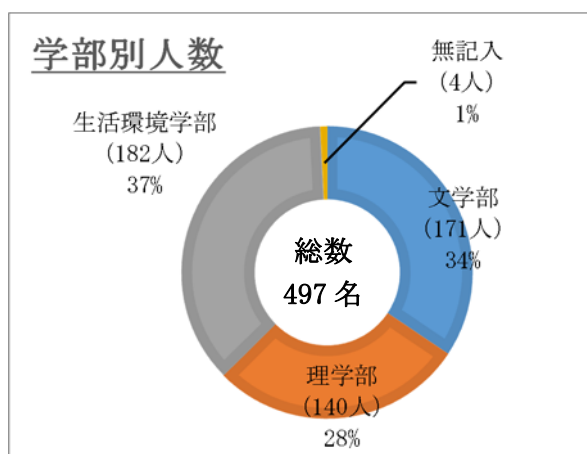
履修者数（人）	662
有効回答数（人）	497
有効回答率	75%

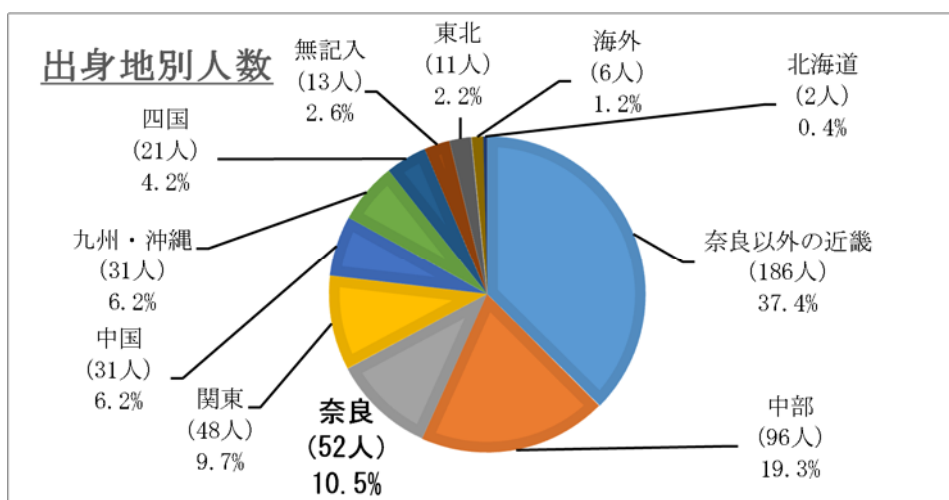
### <調査結果>

#### 1) 全体の構成

学部別・学年別人数については以下のとおりである。学部別人数においては、ほぼ均等に分散している。学年別人数においては、今回調査の対象であった『奈良』女子大学入門』の科目の特性上1・2回生が8割以上を占めている。

次に出身地別で比較した結果、最も多かったのは奈良県以外の近畿出身者で全体の4割近くを占めていた。次いで中部、奈良県の順となり、全体に占める奈良県出身者は約10%で、これは他府県出身者が9割を占める本学の特徴に一致している。





## 2) 「奈良」に対する意識（質問項目と入力数値）

学生の意識調査の分析において、「あてはまる」には+3、「どちらかといえば当てはまる」には+1を、「あてはまらない」には-3、「どちらかといえば当てはまらない」には-1とするデータ処理のための入力値を設けた。なお、「どちらともいえない」ならびに「該当しない・不明」は数値を0として除外した。

### 質問項目

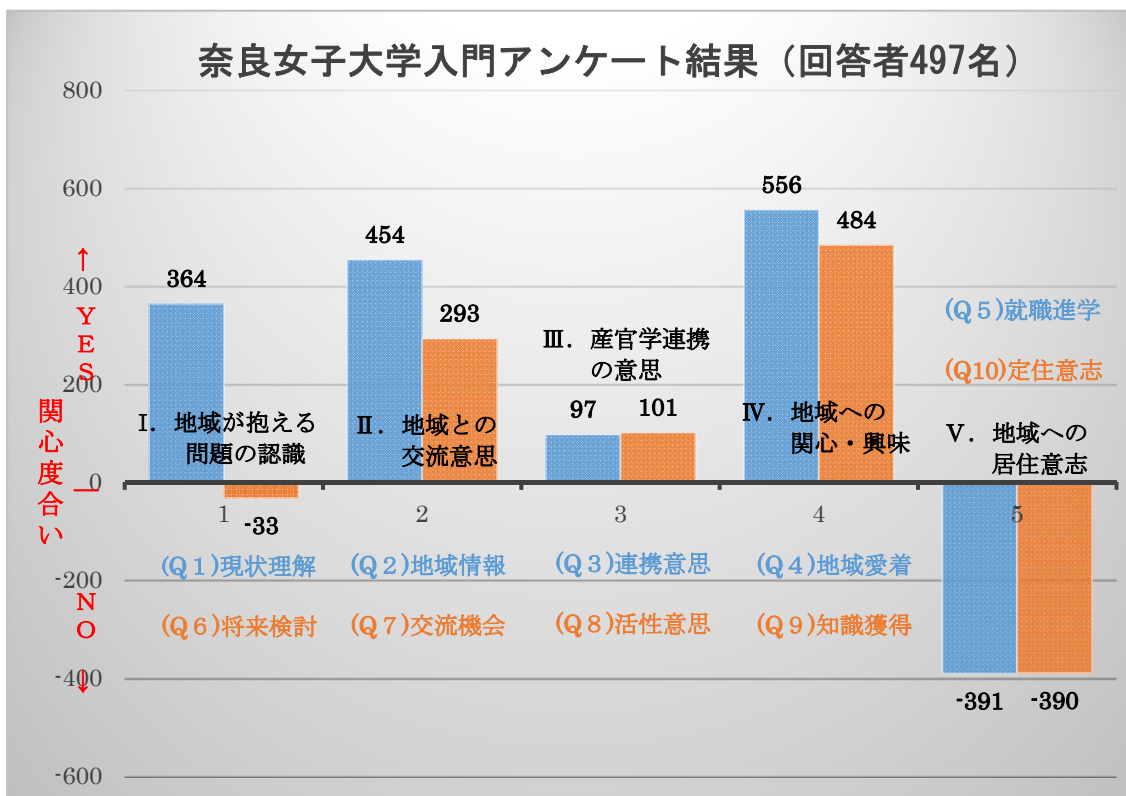
略称	質問項目
現状理解	(1) 奈良が現在抱えている問題について理解するようにしている
将来検討	(6) 奈良の将来はどうあるべきかを考えている
地域情報	(2) 奈良で行われている地域イベント等に興味をもっている
交流機会	(7) 地域住民と自分自身が交流する機会が重要だと思
連携意思	(3) 奈良の企業との連携を意識した学習・研究を行いたいと思う
活性意思	(8) 奈良の活性化につながるような学習・研究を行いたいと思う
地域愛着	(4) 奈良が好きである
知識獲得	(9) 奈良の歴史・伝統や観光地・名所などについて知ろうとしている
就職進学	(5) 奈良県内で就職・進学する予定である
定住意志	(10) 将来的に奈良に住むつもりである、もしくは住み続ける予定である

(参考) 質問項目は平の調査報告を参考にし、「大阪」から「奈良」に変えた。  
平知宏(2017)大阪市立大学における「地域志向系科目」導入に伴う学生意識の在り方。  
大阪市立大学『大学教育』、15(1)、1-9

### 6つの回答文言とデータ処理時の入力数値

各質問項目に対する回答文言	データ処理時の入力値
あてはまる	3
どちらかといえばあてはまる	1
どちらともいえない	0
どちらかといえばあてはまらない	-1
あてはまらない	-3
該当しない・不明	0

### 3) 集計結果



「IV. 地域への関心・興味」並びに「II. 地域との交流意思」については非常に高い。また、「I. 地域が抱える問題の認識」では、地域が抱える問題への意識は高いものの、奈良の将来について具体的にどうあるべきかを考えている学生は少ないという結果となった。「III. 産官学連携の意思」において、産官学連携への関心は高いとは言い難く、さらに「V. 地域への居留意志」では、奈良への居留意志が非常に低いことが分かった。

領域ごとの回答分布状況は以下のとおりである。

#### 「I. 地域が抱える問題の認識」について

(1) 奈良が現在抱えている問題について理解するようにしている

「あてはまる」が78人、「どちらかといえばあてはまる」が224人、一方、「どちらかといえばあてはまらない」が34人、「あてはまらない」が20人回答した。

(6) 奈良の将来はどうあるべきかを考えている

「あてはまる」が40人、「どちらかといえばあてはまる」が111人、一方、「どちらかといえばあてはまらない」が108人、「あてはまらない」が52人回答した。

本学は他府県出身者が多く、「奈良が現在抱えている問題」について多くの学生が理解しようとしていることが窺えるが、「奈良の課題は、出身県の課題でもある」と捉えている学生が多く、奈良での居留意志が非常に低いことが、奈良の将来をどうあるべきかと考える学生は少ない結果となっていると考えられる。

#### 「II. 地域との交流意思について」について

(2) 奈良で行われている地域イベント等に興味をもっている

「あてはまる」119人、「どちらかといえばあてはまる」が194人、一方、「どちらかといえばあてはまらない」が40人、「あてはまらない」が19人回答した。

(7) 地域住民と自分自身が交流する機会が重要だと思う

「あてはまる」が77人、「どちらかといえばあてはまる」が174人、一方、「どちらかといえばあてはまらない」が49人、「あてはまらない」が21人回答した。

多くの学生が学びの場所でもある奈良で行われている地域イベント等に興味をもっており、地域との交流意思が重要と考える学生は多いといえる。

### 「Ⅲ 産官学連携の意思」について

(3) 奈良の企業との連携を意識した学習・研究を行いたいと思う

「あてはまる」が53人、「どちらかといえばあてはまる」が125人、一方、「どちらかといえばあてはまらない」が76人、「あてはまらない」が37人回答した。

(8) 奈良の活性化につながるような学習・研究を行いたいと思う

「あてはまる」が48人、「どちらかといえばあてはまる」が140人、一方、「どちらかといえばあてはまらない」が69人、「あてはまらない」が38人回答した。

奈良の企業との連携や奈良の活性化につながるような学習・研究を行いたいと思う学生は存在するが、学習・研究が具体化していないことから数値は低くなったと思われる。

### 「Ⅳ 地域への関心・興味について」について

(4) 奈良が好きである

「あてはまる」138人、「どちらかといえばあてはまる」が202人、一方、「どちらかといえばあてはまらない」が21人、「あてはまらない」が13人回答した。

(9) 奈良の歴史・伝統や観光地・名所などについて知ろうとしている

「あてはまる」111人、「どちらかといえばあてはまる」が225人、一方、「どちらかといえばあてはまらない」が32人、「あてはまらない」が14人回答した。

奈良に興味がなく、奈良を知ろうとしない学生の割合は10%に過ぎず、非常に多くの学生が奈良への関心・興味を持っている。

### 「Ⅴ 地域への居留意志について」について

(5) 奈良県内で就職・進学する予定である

「あてはまる」が34人、「どちらかといえばあてはまる」が44人、一方、「どちらかといえばあてはまらない」が111人、「あてはまらない」が142人回答した。

(10) 将来的に奈良に住むつもりである、もしくは住み続ける予定である

「あてはまる」が34人、「どちらかといえばあてはまる」が49人、一方、「どちらかといえばあてはまらない」が97人、「あてはまらない」が148人回答した。

質問項目の中で「どちらともいえない」と回答した学生について

(1) から (10) の質問項目の中で、「どちらともいえない」と回答した学生は、(3) 奈良の企業との連携を意識した学習・研究を行いたいと思うが181人、続いて(8) 奈良の活性化につながるような学習・研究を行いたいと思うが175人、(6) 奈良の将来はど

うあるべきかを考えているが 161 人の順であった。要因として履修学生の多くが 1・2 回生で、奈良への興味・関心が高いものの、県内企業に触れる機会がなく、専門的な学習・研究がスタートしていないことなどが考えられる。

#### 4) まとめ

今回は 1・2 回生の履修が多い『奈良』女子大学入門の履修者を対象としたアンケートであり、地域が抱える問題を理解しようとする学生が多いことは地域志向科目導入の成果と言えよう。一方、奈良の将来はどうあるべきかを考える学生は少なく、地域への居留意志については極端に低い（悪い）ということも読み取れる。地域を知り、地域に学ぶという地域志向科目は整備されたとはいえ、高年次学生に向けた専門教育プログラムの中で、行政・県内企業が協働した地域志向教育カリキュラムの構築、奈良の企業と連携した学習や研究ならびに奈良の活性化につながるような学習・研究といった「地域とのより深い学習」の機会を増やすことにより人材の定着、地域への居留意志への向上につながることを期待できよう。また、学生の「地域への居留意志」を育むためには異なるアプローチも併用する必要がある。今後、若者の地域への定着を進めるにあたり、「なぜ、若者が奈良に住みたくないのか」、「県内企業、行政をも含めた地域の若者の受け手側にかかる課題とは何か」といった新たな観点を含めて検討することが必要となろう。

## (7) 地域志向科目の必修化に向けて

地域志向科目とは、「奈良女子大学的教養」の理念に掲げられた問いのうち、“奈良で学ぶことを通じてあなたは世界にどんな貢献ができますか？”“大学で学ぶことはあなたと未来の世代の人たちにとってどんな意味がありますか？”を具体的に問いかけることを目的としている。奈良というフィールドにおいて、“社会的実践に飛び込む”“本物にふれる”“他者と学ぶ、他者から学ぶ”などのアプローチを駆使することによって、問題を解決する能力を養い、さらに専門学の深い学びへとつなげるべく、授業展開を行っている。

本学では事業が採択された平成27年度以降、全学共通教養教育科目及びキャリア教育科目、各学部専門教育科目の中からこれらの要素を持つ科目を括り出し、また新規開講し、学生に対して積極的な履修を呼びかけてきたところである。

その一方、地域志向科目はCOC+事業採択の条件として、「全学生が卒業するまでに一度は履修できる体系的なカリキュラムの構築を各大学で創意工夫すること（平成27年3月COC+事業Q&A）」とされており、本学においてどのような形で上記の条件を満たすことが可能となるか、COC+推進機構教育改革部門において検討を重ねてきた。そして全学組織である教育計画室及び各学部教授会の議を経て、20科目（一部はクラス分けされているが、ここでは各学部規程に記載される科目数をいう。）を地域志向科目として指定し、文学部、理学部、生活環境学部の各学部規程に明確に位置づけ、平成31年度以降の入学生が、卒業するまでに指定された科目のいずれか1科目以上を必修とすることが決定された。

卒業要件として指定された地域志向科目は以下のとおりである。

分類	授業科目	単位	学期	備考
地域志向科目	「奈良」女子大学入門	2	前期	教養教育科目
	パサージュ(一部のクラスが該当)	1	不定期	
	なら学	2	前期	
	なら学+(プラス)	2	後期	
	環太平洋くろしお文化論	2	後期	
	なら学概論B	2	後期	文学部 専門教育科目
	地誌A	2	前期	
	文化人類学特殊研究	2	後期	
	なら学フィールドワーク実習	1	前期	
	コミュニティ・リサーチ	1	前期	
	コミュニティ・アクション	1	後期	
	なら学演習	2	後期	
	地域探究実践演習	2	後期	
	地域社会の課題演習	2	後期	
	サイエンス・オープンラボⅠ	2	不定期	
	サイエンス・オープンラボⅡ	2	不定期	
	森林生物学野外実習	1	前期	
	河川生物学野外実習	1	前期	
	地域連携運動演習	2	後期	生活環境学部 専門教育科目
	地域居住学	2	後期	

## (8) アントレプレナー講座の開講（平成31年度）

起業マインド醸成のため、女性起業家によるセミナー等を実施してきたが、さらなる起業マインドを養成のため、平成31年度アントレプレナー講座の開講に向けた準備を進めている。概要は以下のとおりを予定している。

授業タイトル

「ビジネスプラン」の作り方演習 - アイデアだけでは終わらせない！

授業概要

「ビジネスプラン」は事業を展開する際の指針となる計画案であり、内部関係者で確認、共有するだけでなく、金融機関や投資家等の外部関係者に意図を伝えて、協力・支持を得るために必要不可欠な書類である。本授業では、「ビジネスプラン」の構成要素を理解したうえで、履修生自身の「アイデア」を素材に、履修生相互の観点を交差させ、専門家のアドバイスを得ながら、プラン作成のプロセスを具体的に経験する。

授業計画

第1回 ビジネスプランの必要性について

ビジネスプランを作成するための意義の理解を深める

第2回 ビジネスプランの書き方のノウハウについて

ビジネスプラン作成にあたってのポイントを身に付ける

第3回～第4回 ビジネスプランを考える

アイデアを実行可能な具体的なビジネスプランにしてみる

顧客視点、論理的な事業展開などを身に付ける

第5回～第6回 作成したビジネスプラン発表ならびに意見交換

ビジネスプランを発表し、講師・履修生と一緒にブラッシュアップを行う

競争優位性やマーケティング、将来ビジョンなどを中心に意見交換・情報交換

第7回 ビジネスプランの改良

業績計画や資金計画など数値への信頼性を高める

第8回 改良したビジネスプランへの外部評価と振り返り

外部講師からの評価を受けて、実際のビジネスプランコンテストへのチャレンジを促す